

## クメール古代都市チョック・ガルギヤーにおける「アンドン・ブレン」サイトの調査 Preliminary research on the “Andong Preng” at the Ancient Khmer City, Chok Gargyar

下田一太, チュン・メンホン 早稲田大学理工学術院  
Ichita Shimoda, Chhum Menhong  
Advanced Research Institute for Science and Engineering, Waseda University

### Abstract:

Based mainly on the results of epigraphic studies, the *Koh Ker* site, located approximately 90km northeast of Angkor, was assumed to be *Chok Gargyar*, the ephemeral capital of the ancient Khmer kingdom, temporarily relocated from *Yshodarpura* (Angkor) by *Jayavarman IV* (921/928-941) in the early 10<sup>th</sup> century. It was gradually clarified by researches after the end of the 19<sup>th</sup> century up to today that the site included various temple remains, reservoirs, and banks scattered within an approximately 35km<sup>2</sup> area centering on the State temple *Prasat Thom* and the Baray called *Rahal*.

Preliminary research was conducted in the areas adjacent to the pond that is called *Andong Preng* in this group of archaeological site. *Andong Preng* was identified as the Royal Palace by several researchers, according to one popular theory. In 1930s, Parmentier conducted the excavation survey in this place and reported multiple laterite structures. Besides, several recent researches were also reported that the many tiles and pottery shards are scattered in the area. We conducted the survey on March 2011; 1) recording the laterite alignments on the ground, 2) recording the distribution area of the scattered roof tiles and earthenware and collecting these objects, 3) reassessing the precise plan at the area of the concentration of laterite structure, 4) excavation survey on the laterite alignment with many roof tile concentration.

By the recording of the laterite structures, a rectangular enclosing formation was confirmed. This rectangular structure encloses an area 240m in an east-west direction and 188m in a north-south direction. Substantial amount of aligned laterite structure was found in this enclosure structure. It can be theorized that these laterite lines are the basement or foundation of wooden structures. We collected and recorded the roof tiles in abundance, earthenware shards and small number of the Chinese ceramics that are scattered around the site. A large portion of the roof tiles were centered in alignments with parallel aligned laterite blocks. All Chinese ceramics were classified after 11<sup>th</sup> century after *Koh Ker* existed as capital in the 10<sup>th</sup> century. Therefore, this area probably continued to be used as a regional center after the capital was returned to the Angkor region. It has been presumed that this place was a royal palace, but almost all earthenware of the collected sample were rudimentary. Ceramic and other physical evidence is insufficient at this time to establish *Andong Preng* as a royal palace or a palace for religious or secular ceremony.

**キーワード:** カンボジア, クメール, アンコール, コー・ケー, アンドン・ブレン, 王宮

### はじめに

チョック・ガルギヤーは、10世紀前半から中葉にかけてアンコール王朝の第七代の治世者ジャヤヴァルマン四世により築造された王都で、現在ではコー・ケー遺跡群と呼ばれている。この王都は古クメール語碑文では「チョック・ガルギヤー」、サンスクリット語では「リングプラ」と称された。カンボジア、シエムリアップに位置するアンコール遺跡群は、約600年におよぶアンコール朝のほぼ全時代を通じて王都の座を保ち続けたが、ここチョック・ガルギヤーは921年から短期間ではあるものの、王都が遷されたことが確実なクメール史上稀なサイトである(注1)。

遺跡群内で中心となる宗教施設はプラサート・トムであり、高さ35mのピラミッド型の祠堂の基壇を最奥に控え、多数の建物により複合的な伽藍を構成している。またプラサート・トムをはじめ、主要な寺院は南北約1,235m、東西約596mの貯水池ラハルの周囲に配置されており、ここに王都の中心地区があったことは明らかである(Shimoda, Sato 2009: 25-55)。本稿で調査報告を行うアンドン・ブレンは、プラサート・トムの南、ラハルの西に隣接し、王都内でも最重要地区に立地しており、砂岩造の護岸を擁する池と複数のラテライト遺構が散見されるサイトである(図1)。こうした立地条件と、木造施設の基壇であると考えられる多数のラテライト遺構の痕跡から、アンドン・ブレンは王都チョック・ガルギヤーの「王宮址」であったとされるのが通説となっている。

アンドン・ブレンに関する最初の記録はアンマンによるものである(Harmand 1879: 361-371)。彼は護岸を擁する池に水草が生えていないために、地元住民がこれを「油の池」と呼んでいたことを記している。また、この池の周囲には細長い建物の痕跡が多数残されており、それらは巡礼者や宮廷人、あるいは旅行者達のための宿場、あるいは「シャーラー」であったものと推測した。

その後、エイモニエはこの池が「幸運の泉」と呼ばれていることを記している(Aymonier 1900: 397-411)。彼はこの池の水が清潔なことを記し、この周囲には木造建築が立ち並び、王宮の跡地であるものと推測した。

さらに、ラジョンキエールもまたエイモニエとほぼ同様の記述を残した(Lajonquiere 1902 : 354-381)。パルマンティエは1933年にこの地域での発掘調査を実施しており、ラテライトの遺構が複数発見されたことを報告した(Parmentier 1939 : 17, n.1)。

近年では、エヴァンスがアンドン・プレンの西方に土器が高密度に散乱していることを報告し(Evans 2009 : 52), またハンガリー調査隊は回廊の東辺の一部で表採調査を行い, 収集遺物の90%が瓦片であることを示した(Laszlovszky, J., Siklódi, C 2009 : 177-180)。

筆者らは2011年3月に, このサイトにおいて, ①地上に露出している木造施設の基壇であったと考えられるラテライト列の記録, ②散乱している瓦や土器の分布記録, ③ラテライト列が集中している地区での詳細な平面記録, ④ラテライト列が集中している地区の中でも特に瓦がまとまっている地点での発掘調査を実施した。

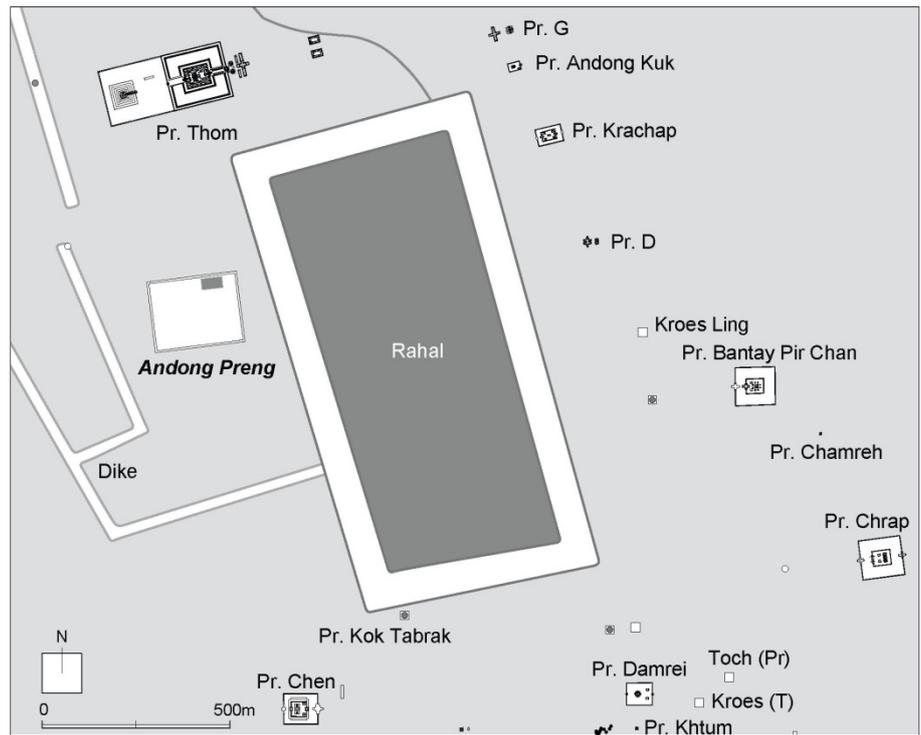


図1 チョック・ガルギャー中心部の主要遺構

## 1. サイト全体の構成

堆積土砂によって当時の遺構面の多くは埋伏しているが, 堆積土砂は比較的浅いようで, 所々にラテライト列となる遺構が露出している。これらの断続的なラテライト列を記録すると, 東西240m, 南北188m, 正方位より8.5度反時計回りの傾きで, ラテライト列が巡らされている矩形の外郭構造が断続的に確認された(図2)。ブラサート・トムの伽藍の主軸線角度は14.0度, ラハルは15.0~15.5度それぞれ反時計回りに回転しているから, この外郭構造の角度はそれらとはやや異なっている。

このうち, 南辺を除く三辺では約4.4m間隔で二列のラテライトが認められた。西辺の北側では, 二列のラテライトの向かい合う面を直径35cm程の円形に削り込む痕跡が2.8~3.0m間隔で認められたため, これらは柱穴で木造瓦葺きの上部構造がラテライト列を基壇として回廊状にめぐらされていたことが推測される(図3)。地上に露出しているラテライト列の一部は, 少なくとも

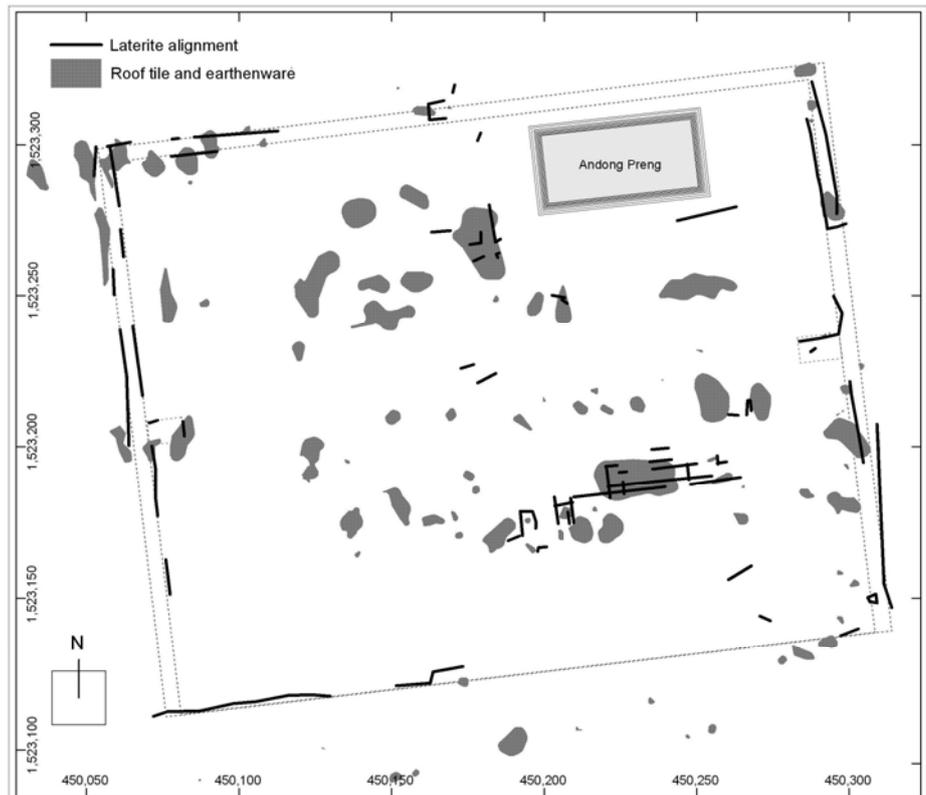


図2 アンドン・プレン全域配置図(ラテライト列と散乱した瓦・土器の分布図)

も二層が積み上げられているように看取される。

東辺のラテライト列は、外面がモルディングによって飾られているため、この施設全体の正面を示していることも推察される(写真1)。二列の平行に走るラテライトの間隔は一定ではなく、どうやら小部屋毎に間隔が異なっていたようで、東辺の中央の方が回廊の幅が広がったようにも思われるが、確認できる部分は限られているため、今後の精査を要する。

南辺はラテライト列が単線上に確認されただけであるが、他辺と同様に、もう一列のラテライトが埋伏し、四方は回廊状の建物に取り囲まれていたものと推測される。また、東西辺のほぼ中央では内側にラテライト列が張り出している箇所が部分的に認められた。東西辺の中央に十字型平面の門となる建物を構えていたか、あるいは全体を南北に二分するように中軸線上に通廊が走っていた可能性が推測される。

この外郭をなす回廊状の施設内の北東には砂岩造の護岸に縁取られた東西約56m、南北約28mの池が位置する。現在では水面は水草が覆われている(写真2)。調査時には地雷撤去部隊がこの池のすぐ東側に基地を構えており、この貯水を水浴びや洗濯に利用していたが、乾季の終わり近くである3月半ばでも水は枯れることなく比較的澄んでいた。

西辺のラテライト列のさらに西側には約160m離れて、南北線からやや反時計回りに回転した緩やかな低い土手が約320mにわたって連続しているのが認められる。土手は幅が約25m、比高が1~2mであり、上部にはラテライトや煉瓦、瓦が多数散乱している。部分的に土手と平行するラテライト列も土手上に認められる。回廊状の外郭構造の南辺を西方に延伸する線上には、この土手に至るまでに、いくつかのラテライト部材が散乱していることから、南北のラテライト列はこの土手まで西方に連続していた可能性も推測される。

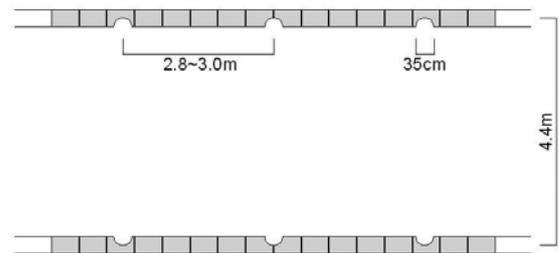


図3 平行するラテライト列に残る柱穴の模式図(西辺北側)



写真1 モルディング装飾が施されたラテライト列(東辺)



写真2 砂岩造の護岸に囲繞された溜池

## 2. ラテライト列の集中地区における発掘調査

回廊状の遺構の内側にも、多数のラテライト列が地上に散見されたが、まとめてラテライト列が確認されたのは、南東地区、東西に約60m、南北に約22mの範囲である。ここにまとめて確認されたラテライト列は、いずれも回廊状の構造とほぼ同じ回転角度に従っており、東西に長いラテライト列が多い(図4)。木造施設の基壇であったことが予想されるが、これらの石列のどちらが室内でどちらが室内であるのか、あるいはどのように建物が連結されているのか等、上部構造の平面構成を推測することは難しい状況にあった。また、ラテライト列に加えて、部分的に煉瓦敷きの床面らしき遺構が地上に露出する地区も認められた。こうした石列の中でも、特に瓦が集中していた箇所において、ラテライト列に直交して横断する小規模な発掘調査を実施した(図4)。

幅2mで平行して走る二本のラテライト列を横断するように、1×4mの範囲で発掘調査を開始した。北より南へ順にA1~A4と1m毎に区画し、最初にそれぞれの区画で地表を覆いつくすように散乱していた瓦や土器片を収集した(写真3、表1)。

地表の遺物を採取したのち、地表層をクリアランスしたが、土砂が硬く締まっており、作業が難航したために、ラテライト列の間は、既に窪地状になっていた西側のBエリアに調査地点を移した。この窪地の土層は過去に攪乱されているようだが、さほど深く掘り下げられていたわけではなく、下層は堆積状況を保持していた。

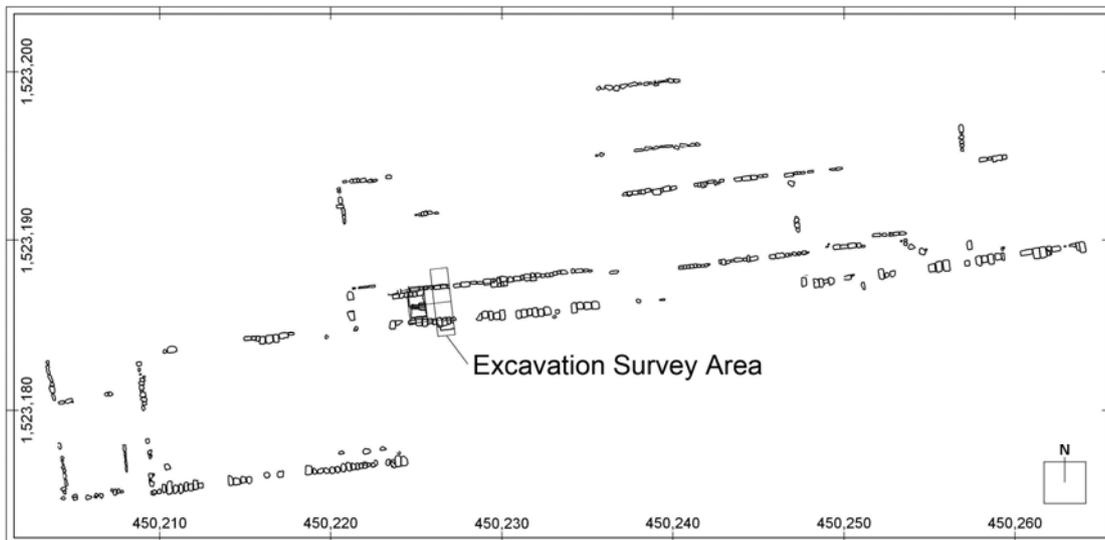


図4  
回廊内南東地区におけるラテライト基壇の配列図

ラテライト列の間からは表層土の下層からも大量の瓦片が出土したのに対して、列の外側の表層土の下層からはほとんど遺物が検出されなかった。また、ラテライト列のほぼ中央には排水溝とも推察しうるラテライト造の遺構が発見された(写真4, 図5,6)。平行するラテライト列の中央に据え付けられた幅25cmのラテライト列の上面両端に、厚さ15cm、高さ25cm程の板状のラテライト部材を立てて、中央に溝を設けた構造である。この遺構が二筋のラテライト列の間で、どれほどの長さにとり連続しているのか、今後の追調査に興味を持たれる。

ラテライト列は地上に露出していた層の下にもう一層が検出され、二層構造であることが確認された。下層のラテライトは二列の中央にやや寄って並べられている。このように階段状に配置されていることから、この二列のラテライト間が長手平面の建物の室外にあたるのが推測される。また、この列の間に排水溝と思われる遺構があることもここが室外であると考えられる根拠を呈している。とはいえ、現段階で調査地区は限定されており、またこの施設の用途等が定かではない以上、今後のより慎重な検証が求められる。

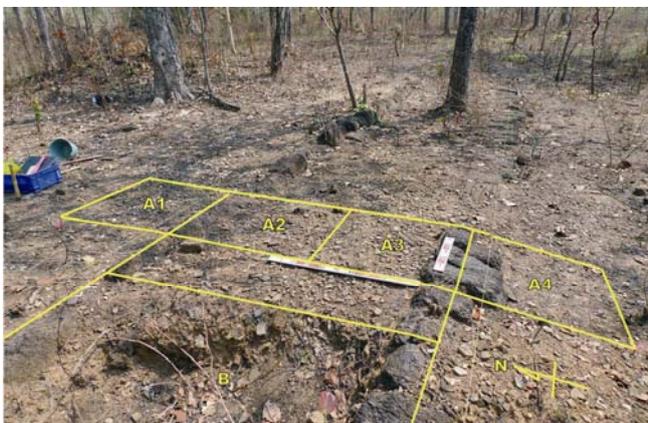


写真3 発掘エリアのトレンチ設定



写真4 ラテライト列間から出土した排水溝と推測される遺構

今回の出土遺構の機能や性格を議論するためには、この周囲全体での施設の構造を確認することが不可欠であり、今後のさらなる調査が求められる。今回の調査により、堆積土砂が50cm以下に過ぎないことが確認されたため、当時の地表面まで掘り下げる調査は比較的容易であり、今後のより広域での調査が期待される。

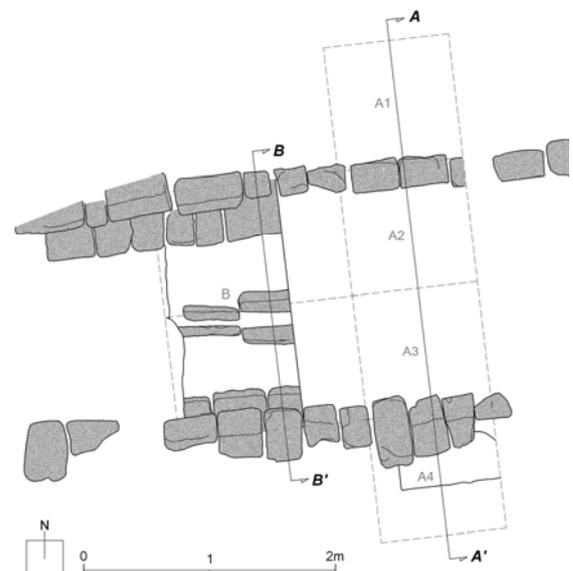
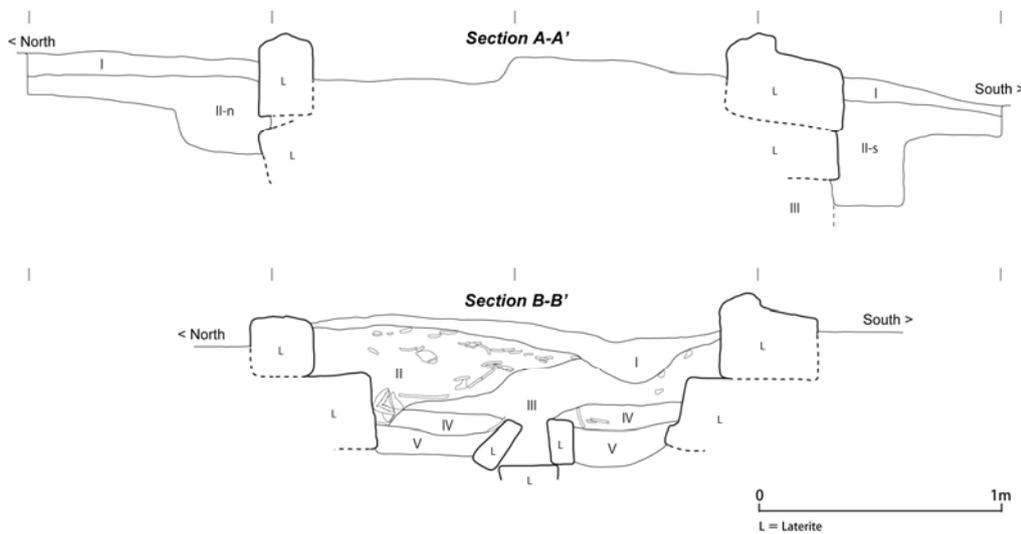


図5 発掘調査により出土したラテライト列と排水溝



**A-A' section**  
 I Surface soil, disturbed dirty soil with many roof tiles, silty sand, dark reddish brown  
 II-n Very hard clay without roof tile and earthenware, brown  
 II-s Very hard clay without roof tile and earthenware, reddish brown  
 III Under laterite block, hard compacted clay with laterite fragments and roof tile fragments

**B-B' section**  
 I Surface soil, disturbed dirty soil with many roof tiles, silty sand, dark reddish brown  
 II Hard silty clay, many roof tiles and small amount of bricks, bright brown  
 III Hard silty clay, small amount of roof tiles, bright brown  
 IV Hard clay with laterite chips, small amount of roof tiles, dull yellowish brown  
 V Very hard compacted soil with laterite chips, very rare roof tile, dull yellowish brown

図6 発掘調査により出土したラテライト列と排水溝(断面A-A'と断面B-B')

### 3. 表探遺物と出土遺物

このサイトの周囲には土器・瓦が多数散乱しているが、その大半は瓦片である。外郭構造内とその近辺において遺物の分布状況を記録し、表探調査を行った(図2)。また、上述の発掘調査による出土遺物の記録と分析を行った。土器と瓦は外郭構造をなすラテライト列に沿って多く分布していた。また、外郭構造の内部にはかなり広い範囲に散乱しているが、特に中央やや東よりに多く認められた。これらの遺物は攪乱されていたり移動されているとは考えにくいので、この分布に従って、瓦葺きの木造施設が配置されていたものと推測される。表探調査では、土器や瓦の他に、中国陶磁器5点と鉄器1点を収集した。以下に表探調査、発掘調査にて採集された遺物について整理する。この二つの調査から得られた遺物総数は2,358点。そのうち瓦片716点、土器片15点、両者の区別が難しかったものが1,620点、クメール陶磁1点、中国陶磁5点、鉄品1点である(表1)。

excavation area / Trench No.	shape clay color	Roof tile										Pottery					Unkown		iron	Weight(kg)				
		Round tile		Flat tile		Round Key		Flat Key		End tile		Unkown		Rim	Base	Decoration	Glazed	Chinese			Red	Grey		
		Red	Grey	Red	Grey	Red	Grey	Red	Grey	Red	Grey	Red	Grey										Total	
A1 surface		3	2	10	4	1						27	31	78						82	40		3.9	
A1		1	3	2	6	1		1			1	21	23	59	1		1			76	72		3.5	
A2 surface		-	-	2	2	1						19	19	43	1		3			180	143		3.5	
A2		-	-	-	1		1					17	29	48						67	40		2.3	
A3 surface		-	-	2	1			1				18	38	60		1	1			322	54		4.1	
A3		-	-	-	2			1	1			26	58	88						89	118		4.4	
A4 surface		-	-	-	1			2			1	2	6	12			1	1		41	42		1.0	
A4		-	-	1	-							5	4	10	1					37	30		0.6	
B surface		-	-	1	5			1				15	17	39						3			1.5	
B		3	3	2	16	1	5	2	2		9	39	145	227			2			106	78		13.0	
B (Drainage)		-	1	-	3			1				1	28	34									1.7	
Location	Scattered objects near excavation area			1	1	1	2*	1	2		7			15			3						1	
	Scattered ceramics at south of enclosure NW of Prasat Thom							1	2					0					5					
	Total	7	10	20	42	5	8	10	8	0	18	190	396	716	3	1	11	1	5	1003	617	1	2358	
	Grand total			17	62	13	18	18	18		588	716					21			1620	1			

表1 発掘調査と表探調査による採集遺物の分類

#### 3-1. 瓦

発見された716点の瓦片は、胎土が赤みを帯びた瓦片232点と、胎土が灰色の瓦片484点に二分される。円錐形の留め具を伴った丸瓦片13点(赤色:5, 灰色8)と、平坦な留め具を伴った平瓦片18点(赤色:10, 灰色:8)が含まれる。瓦当は計18点で、全て灰色の胎土からなり、無軸である。多くは丸瓦か平瓦の区別ができない小片であった(計588点のうち赤色:190, 灰色:398)。収集された瓦片はいずれも小片であり、接合しても完形を復元できる瓦は一点も得られなかった。

確認された円錐状の留め具を伴う丸瓦片13点では、留め具の長さは1.3cm~4.5cmと多様であった。基本的に丸瓦では瓦体と留め具には同じ色の胎土が使用されているが、瓦体には灰色の粘土が、留め具には赤みを帯びた粘土が使われていたものも

一部に確認された。平瓦には平坦でやや長い留め具を伴うようであるが、記録された平瓦片16点では、留め具の幅は4.5～14.5cmで、丸瓦の留め具と同様に形状は定形化していない。また留め具が付けられた位置は、瓦の上端に沿っているものと、上端から数cmの間をとるものがある。

瓦当は蓮の葉(トロボック・チュック)を4枚重ねた装飾が施されている。便宜的に瓦の各部を内房・内区・中区・外区と分けると、それぞれ区画における細部装飾の有無から四種類に大別された。

タイプAは最も単純なもので、各区には細かい装飾は認められない。3点がこのタイプに分類されたが、いずれも小片であったため完形を復元することはできない(写真5-A)。このタイプの中でも、外形が丸みを帯びているものや直線的なものなど、多様な形状がみられる。タイプBは外区にのみ「コン・トゥイ・ホーン(奇妙な鳥の尻尾)」と呼ばれる細部装飾がある。このタイプの瓦は計4点認められたが、いずれも完形を復元することは難しい(写真5-B)。タイプCは中区、外区の二段にコン・トゥイ・ホーンの装飾がみられる(写真5-C)。タイプDは内区と外区にコン・トゥイ・ホーンの装飾がみられる(写真5-D)。これら瓦当の装飾の差異が木造架構であった上部構造の別に対応していた等、なんらかの有意性を有していたか否かについては、今後の調査が求められる。

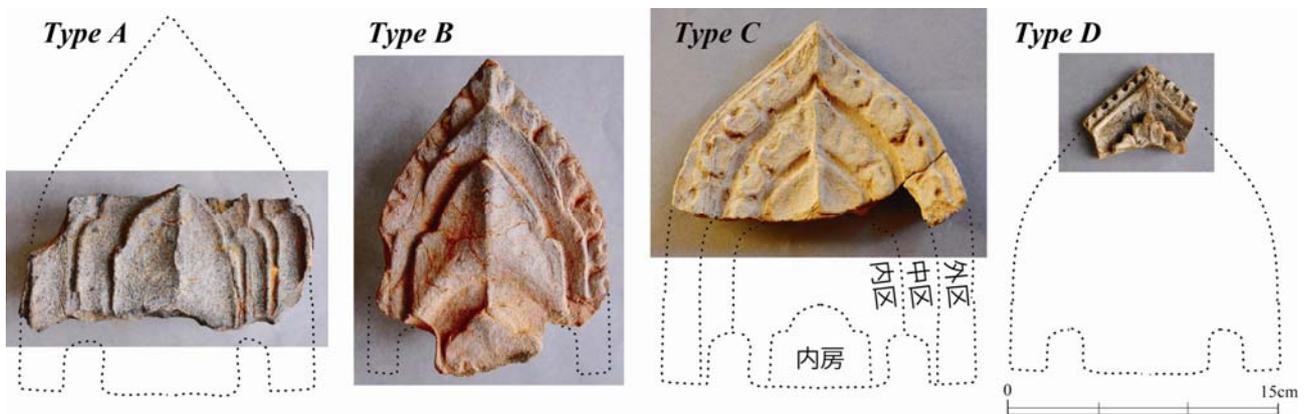


写真5 採集された瓦片(装飾部位によって4種類に分類)

### 3-2. クメール陶磁器と土器

計16点の土器片が採集された。その中の1点は灰釉のクメール陶器である。また、口縁部が3点、粗製土器の底部が1点、装飾を持つ土器片が11点確認された。どれも小片であり完形を復元することはできない。

### 3-3. 中国陶磁

外郭をなす回廊状のラテライト遺構の南側にて、計5点の中国陶磁器が収集された。写真6の①②の染付2点は福建・広東省産、19-20世紀のものである。④染付1点は景德鎮窯産かと思われるが高台が厚く景德鎮とやや異質である。14c後半～15世紀中頃のものとも推察されうるが、文様は手を抜いており、断定することは難しい。福建省産の16c末～17cを上限としてそれ以降のものである可能性もある。⑤は龍泉窯系青磁、南宋後半～元(13世紀後半～14世紀後半)の可能性が大きい。③も断定することは難しいが、白磁ならば上限11世紀後半～12世紀前半、または12世紀代。青磁ならば12世紀中頃～14世紀まで幅がある。福建省産かとみられるが龍泉窯系青磁の下手か区別つかない。



写真6 採集された中国陶磁器

### 3-4. 鉄品

表面採集の調査中に1点の鉄品が確認された。全長27cmで、コの字型をした鏝と推測される。地表に散乱していたものであり、年代は不明である。

## 4. 結論

採集品の大半は瓦片であった。瓦はラテライト列が露出している地区の付近に集中して認められるため、瓦葺きの木造施設がラテライト基壇の上部に立ち並んでいた様子が想像される。土器も確認されたが、その量は少なく、いずれも粗製品であった。クメール陶器はほとんど認められず、また中国陶磁器はラテライトの外郭構造のさらに外側の南回廊付近に散乱していたものであった。中国陶磁器はいずれもコー・ケー遺跡が王都であったと考えられる10世紀前半よりも新しいものであり、この地区が王都として利用された最盛期よりも後に長く使用され続けた可能性が推測される。この施設群の中心部は長期に利用、改築がなされている可能性があり、地表に攪乱して散乱しているものは、古い遺物が淘汰されている可能性も考えられよう。この地区は王宮跡地と推測されることも多いが、今回の調査で採集された遺物は瓦の他に粗製の土器片がほとんどである。アンコール・トム内の王宮跡地と比較すると中国産陶磁器や精製品がほとんど認められず、祭祀関連の儀式や王宮としてこの施設群が使用されていたことを示す積極的な根拠は認められなかった。とはいえ、クメール遺跡においては、こうした組積造の基礎に木造上部構造よりなる施設群となる類例は少なく、アンドン・プレンはアンコール・トム内の王宮跡地に類する極めて貴重なサイトである。今後は地下探査や発掘調査等を通じたより面的な平面構成の把握を試み、この施設の機能を解明すべく特徴的な出土遺物の採集を目的とした研究が求められよう。

### 謝辞：

本研究は日本政府文部科学省科学研究費補助金「クメール帝国地方拠点の都市遺跡と寺院遺構に関する研究（研究代表者：溝口明則）」の調査として実施した。現地調査においてはアプサラ機構からの協力を得た。現地での測量や発掘調査においては内田賢二(ライカジオシステムズ、早稲田大学理工学研究所嘱託研究員)、チャン・ピタロン(カンボジア文化芸術省)、ソム・ナム(アプサラ機構)、ロバート・マッカーシー(日本国政府アンコール遺跡救済チーム)、石塚充雅、島田麻里子、荒川千晶、白石佳織(早稲田大学理工学部学生)からの協力を得た。また、出土遺物の整理には、豊永翔平(早稲田大学文学部学生)、中国陶磁器の分析は山本信夫(早稲田大学理工学術院客員准教授)、既往研究の整理には佐藤桂(東京文化財研究所)の協力を得た。以上の方々に記して感謝申し上げます。

### 註：

1. イーシャナヴァルマン二世とジャヤヴァルマン四世は、イーシャナヴァルマンが死去する928年までは両者が同時に王位に就いていた。つまり、イーシャナヴァルマンはアンコール遺跡において、そしてジャヤヴァルマン四世は遷都したコー・ケーにおいてである。ジャヤヴァルマン四世は彼が死去する941年までコー・ケーに拠点を維持し、彼の後継者であるハルシャヴァルマン二世もまた941年から944年まで同地にて治世を続けた。ジャヤヴァルマン七世の治世期に建立されたプラサート・アンドン・クックを除けば、コー・ケー遺跡群に残された大半の寺院はこの約20年という短期間に造営されたものと考えられる。

## 文献目録

Aynomier, É.

1900, *Le Cambodge: I. Le royaume actuel*, Paris, Ernest Leroux: 397-411.

Evans, D.

2009, Towards a landscape archaeology of Koh Ker: Methods, Issues and Recent Research, *JAYA Koh Ker Project Annual Report*: 25-63.

Harmand, J.

1879, Notes de voyage en Indo-Chine, les Kouys. Ponthey Kakeh. Considérations sur les monuments dits Khmers, [Communication faite à la Société académique indo-chinoise le 29 avril 1879], *Annales de l'Extrême-Orient*, no.1(12): 361-371.

Laszlovszky, J., Siklódi, C.

2009, Archaeological topography and settlement archaeology investigations, *JAYA Koh Ker Project Annual Report* : 170-181.

Lajonquier, L. É.

1902, *Inventaire descriptif des monuments du Cambodge*, Vol.1, Paris, PEFEO 4, E.Leroux: 354-381.

Parmentier, H.

1939, *L'art khmer classique, les monuments du quadrangle du Nord-Est* (2 vol.), Paris: 15-94.

Shimoda I., Sato K.

2009, Religious Concept in the Layout of the Ancient Khmer City of Koh Ker, *UDAYA*, 10: 25-55.